



TITLE:

天象

AUTHOR(S):

CITATION:

天象. 天界 1937, 17(190): 163-164

ISSUE DATE:

1937-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167406>

RIGHT:



I——太陽と月 (京都に於る値)

日附	日出	日没	(星 座)	日附	月 齢 (正午)	月 出	月 没	(星 座)
日	時 分	時 分		日	時 分	時 分		
1	6:57	17:25	(や ぎ)	1	19.4	23:2	9:29	(乙 女)
6	6:52	17:30	"	2	20.4	23:58	9:59	"
11	6:47	17:35	"	3	21.4	—	10:32	(天 秤)
16	6:42	17:40	(みづがめ)	4	22.4	0:55	11:9	(さ そ り)
21	6:38	17:45	"	5	23.4	1:50	11:50	(蛇 遣 ひ)
26	6:32	17:50	"	6	24.4	2:44	12:37	(射 手)
				7	25.4	3:35	13:29	"
				8	26.4	4:23	14:27	"
				9	27.4	5:6	15:28	(山 羊)
				10	28.4	5:46	16:32	"
				11	29.4	6:22	17:37	(水 瓶)
				12	0.8	6:56	18:43	"
				13	1.8	7:29	19:49	(魚)
				14	2.8	8:1	20:57	"
				15	3.8	8:36	22:5	"
				16	4.8	9:13	23:14	(羊)
				17	5.8	9:55	—	(牡 牛)
				18	6.8	10:42	0:23	"
				19	7.8	11:36	1:29	"
				20	8.8	12:35	2:30	(雙 子)
				21	9.8	13:39	3:24	"
				22	10.8	14:44	4:12	(蟹)
				23	11.8	15:49	4:53	"
				24	12.8	16:52	5:26	(獅 子)
				25	13.8	17:54	6:1	"
				26	14.8	18:54	6:31	(乙 女)
				27	15.8	19:52	7:0	"
				28	16.8	20:50	7:29	"

II——天象

日 時	
4, 1	火星が月と合(北5°)
5, 17	金星東方最大離角(47°)
7, 23	水星西方最大離角(26°)
8, 22	木星が月と合(南2°)
9, 15	水星が月と合(南2°)
14, 0	土星が月と合(南8°)
15, 8	金星が月と合(南3°)

下弦	3日, 21時:4分	新月	11日, 16時:34分
上弦	18日, 12時:50分	満月	25日, 16時:43分

主な流星群

日 附	赤 經	赤 緯	附近の星	性 質
上 旬	213°	+52°	牧夫座北部	甚 速

遊 星 界 (2 月)

水 星 射手座から山羊座へ、赤経2時間ばかりを東進する。観望には上旬がよく、日出前の東天にかなり高く見える。+0.2等星であるから、黄道附近を注意すれば可。

金 星 宵の明星は太陽から離れ、寒空に高くかかるやうになつた。5日には最大離角となり、それからは少しづつ低くなるが、光輝は増す。観望の絶好期。春分点のあたりから魚座を東進。月末の光度 -4.3 等。

火 星 太陽と離れてゐること6時間。夜半すぎには東天に血の色を見せるやうになつた。位置は天秤座を東進中。地球に接近しつつあるので、光度も標準1等から0.4等まで増大。表面観察の準備を怠りなく――

木 星 位置は射手座で、暁の明星と見あやまれるかもわからない-1.5等星。

土 星 来月は太陽と合の位置になるので、今は宵の西天低くわづかに見えるだけ。光度は依然として+1.4等。水瓶座の東端。

天王星 羊座の西南部にある宵の星。6.1等星

海王星 獅子座の東部をわづかに逆行中、天王星と共に観望には好位置にあるが、小望遠鏡では圓盤形はのぞめない。7.7等星。

冥王星 蟹座と双子座との境界にある15等星。

× × × × ×

星 座

銀河が中天を貫流し、豪華を誇る冬の諸星座がその中に浸つて燦として輝く。3等星さへ持たない淋しい一角獣座が私は好きである。何故か理由はわからない。晩秋の暁に流星の輻射点を追うた獅子座が高くなり、北天には北斗七星、南天には長いヒドラの一部分が見えるやうになると、プレヤデスを西天におくる名残り惜しさはあつても、星座は正直に春を豫約してくれるから楽しい。『小さくともまとまつてゐるぞ!』と小犬座が威張れば、プレセペを持つ蟹座がフフンと軽くあしらつて鼻を高くする。天界の自慢物語は想像するだけに一つのよろこびである。神話は遠くギリシヤに求めずとも星を知る我等の胸中に往來する。(淡翠山人記)